

K 女子大学のピア・サポート活動における学生の成長 —ピア・サポーターの成長に注目して—

¹ 鳥越ゆい子 ² 武佐和子 ³ 川西千弘

¹ 帝京科学大学こども学部こども学科

² 立教大学人権・ハラスメント対策センター

³ 京都光華女子大学人文学部心理学科

The Growth of Graduate Student through peer-Support Activity
-Focus on the Growth of peer-supporter-

¹ Yuiko TORIGOE ² Sawako TAKE ³ Chihiro KAWANISHI

Abstract

A purpose on this report is reviewing growth drivers of the university students in peer-support activity. In “K” Women's College, they provided advice and planned events for other students as peer-supporter. Then they acquired 'Shakaijin Kisoryoku' (Basic Skills to Work in the Society) through the peer-support activity.

According to what peer-supporters say, they learned as follows, through peer support activity. In the first, they have come to be able to think more actively than before. Second, they constructed new relationships. That is to say, this is their first time to work together in harmony. Finally, the activity gave them a sense of achievement. These experiences allowed them to grow.

Four factors have made them grow. First, it is their surroundings. It is important that all faculty members have entrusted them. Second, it is their relationships. That is to say, they must understand each other and collaborate together. Third, it is important to motivate them with success experiences. And, the last factor is atmosphere of peer-support community. Junior staff members have learned and been supported their growth by senior ones. It has been formed in their activity.

Therefore in this case, peer-support activity has offered opportunities to act for others and collaborate with others, to them, who had used their all energy only for themselves. As the result, they have grown by the opportunity.

Keywords: ピア・サポート、大学生、社会人基礎力、学生支援、脱生徒化

I. 問題関心

大学における学生支援業務への学生活用が盛んである。それは学生支援業務における人手不足のためではなく、学生がそれに積極的に取り組むことによって、学生支援の充実のみならず学生の学びの機会として価値をもつという理解からである。この種の活動は大学によっていろいろなカタチがあり、名称も様々であるが、「学生参画型大学運営」¹⁾ (沖他 2011) という表現がその性格をかなり正しく表しているように思われる。こうした状況の中、特に 2000 年以降ピア・サポート活動を開始する大学があらわれてきた。そこでのピア・サポート活動とは次の 3 つのいずれかが軸になっているのが一般的である。すなわち、①相談活動、②修学支援、③新入生支援である (大石他 2007²⁾)。

こうしたピア・サポート活動の中では、ピア・サポート訓練が学生の成長に効果をあげる (岡田 2010³⁾、山崎他 2005⁴⁾) ことは予想された結果であろうが、それに加え、ピア・サポート活動それ自体の中でも

サポートされる側だけではなくサポートする側の成長が報告されている。具体的には、主に 2 側面での成長が言われる。ひとつは、大学に関する知識の増大 (宮尾 2006⁵⁾) や、活動に関わる知識の確実化 (中出 2003⁶⁾、中出他 2004⁷⁾) といったある特定の知識面の成長、いまひとつは、コミュニケーション能力の向上 (伊東 2007⁸⁾) や、コミュニケーションスキルの向上と心理的発達の促進 (内野 2003⁹⁾)、また活動を通して自信をつけエンパワーメントされる (中出 2003⁶⁾、中出他 2004⁷⁾) といったいわゆる社会性に関わる側面の成長である。特に後者は、経済産業省が「社会人基礎力」という概念を提唱することに見るように、若者の社会や他者と関わる力が危ぶまれている現在、社会性の成長を促したいへん貴重な取り組みだと評価されよう。

本稿では、この「社会人基礎力」の獲得を学生自身が評価する K 女子大学のピア・サポート活動を事例に、サポーターの成長を支える要因について整理を試みたい。そのためにまず次節では、やや丁寧

に同校の活動について成果と課題を記述する。そしてその活動状況をふまえたうえで、活動の中でピア・サポーターらの成長に関わる学習過程について言及することにしたい。なお、このK女子大のピア・サポート活動の事例は、筆者ら自身が教職員の一人としてその初期設計に関わるとともに、活動の成果を観察する立場におかれていた。その意味で内部からの観察であり、完全な客観性を保証できるかどうか危惧するところもある。だが他面、内部からではないと観察できない事項があることも事実であり、これらをふまえて考察することにした。

II. K女子大学におけるピア・サポート活動

1. ピア・サポート活動開始の背景と目的—K女子大学の特徴とピア・ひろばの創設

K女子大学は、京都市内の西部に位置し、学生数1800人規模の私立女子大学である。3学部5学科に短大部の2学科を併設している。2008年頃より、全学的にエンrollment・マネジメントの考えを取り入れた制度改革をおこない、「平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」、及び「平

成20年度新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に選定された。同校のエンrollment・マネジメントの捉え方は一般的に言われる概念と少し異なっている。当時の学生支援GPの事例集を見ると「エンrollment・マネジメントとは米国の大学で発達した教育経営政策の手法であるが、一般には、学内の様々な資源を統合的かつ戦略的に動員することによって、学生数（Enrollment）の流入や進級率、卒業率をコントロールすることを主眼としている。それに対して、本学（注：K女子大学）では、エンrollment・マネジメントを単なる経営策ではなく、教育モデルだと捉えている。すなわち、個々の学生に対する入学前から卒業後にいたるまでの学生生活支援と個別対応教育の有機的運用を通じて、学生の不安や疑問に徹底的に対応し、更にその過程で主体的な学習意欲を引き出すことによって、より高度な水準で教育理念と学力の達成を図るというものである。」¹⁰⁾（金2008）と説明される。

K女子大学のピア・サポート活動はこうした制度改革の途上で提案され開始された取り組みである。それは、「従来の学生支援を見直し、教員・職員及び

表1. ピア・ひろばの創設主旨と役割

（川西2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.34より作成）

(1) ピア・ひろばとは

学内食堂の建物2階に設置。学習支援と修学支援、双方を兼ね備え、学生に居場所と安心感を提供するための総合相談部署（学習＝PCの配置、相談、読書、休憩、喫茶、を可とする）。開催時間は月～金曜日の授業開講日の12時～5時40分、常時開催とする。

～以上の体制を整え、学生間、学年間、学部学科間の交流と支援を活性化させる。なお、電話やメールでの相談にも応じる。～

(2) ピア・ひろばの体制

基本的には、昼休み～5時までピア・サポーター2人・メンター1人が常駐する。

メンターの総括として臨床系大学院出身者の常勤職員を1人配置する。主としてメンターとして機能するほか、ピア・ひろばの案内・総合窓口としての相談業務をはたしながら、以下に記すメンターやピア・サポーターの総括・運用・教育をおこなう。その他EM推進に関する業務も併任する。

*ピア・サポーター（学部生可）の配置

主に学習面や生活上の相談に対応。必要に応じて、キャリアセンター、学生生活や教務を司る部署など関係部署と連携して相談業務をこなしていく。

◎ピア・サポーター及びメンターは、必要なピア研修及び学習を行い、それを随時受講した者のみ採用とする。

(3) ピア・ひろばの役割

①居場所の創出～学生がたむろする場所（学内食堂など）、つまり学生が行動する流れのなかの場所に設置することで、学生が気軽に立ち寄りやすい環境を整備する。～

②各学部間・各学科間・学年間交流の場として、仲間づくり・コミュニケーション、情報交換の活性化を支援する。

③相談窓口の一元化により、これまで「どこで何を聴けばいいのか」と学生にとっては迷いがち、また足が遠のきがちであった相談を行いやすくする。

④身近な上級生が対応することで、相談・学習する学生の身構えや防衛反応をより低下させる。

⑤適切なタイミングでイベントを企画し、学生にキャリア形成や学習の啓蒙を与える。

→大学全体で行ったほうが効率的な企画や学生のニーズに合った企画、またLRで企画された興味深い内容のものを活かしていく（例、1年生むけのテスト攻略講座など）。

⑥要支援学生のみならず、利用者やピア・サポーターおよびメンターの社会的スキルと自信を醸成する。

⇒上記①～⑤により、要支援学生への対応のみならず、要支援学生に落ち込ませない予防的措置としても機能すると考えられる。

表2. 2010年度ピア・サポート研修内容
(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.38-39より作成)

- ①オリエンテーション(ピア・サポーターの活動内容と研修の主旨説明)
- ②座学(ソーシャルサポートの説明とピアサポートの重要性および概念説明)
演習+座学(自己認知Ⅰ「あなたは他人からどう見られている?」)
- ③座学(「ピア・ひろば」とは)
演習+座学(自己認知Ⅰ「自分の対人関係スタイルを知ろう」)
- ④演習+座学(話の聞き方Ⅰ「積極的傾聴など」)
- ⑤座学(本学のピア・サポートの特徴について―他大学と比べて)
演習+座学(話の聞き方Ⅱ「気持ちを聞きとる」)

学生(上級生)が連携し、要支援学生一人一人にふさわしい絆づくりを行い、個々の学生が抱える問題や希望に応じた適切な配慮と支援によって、円滑な修学を可能にすることを目的¹¹⁾(川西 2012,p.27) とするために生まれた施策のひとつである。

K 女子大学のピア・サポート活動(「ピア・ひろば」)の創設当時 2010 年の主旨と役割は表 1 のとおりである。明確な「課題」を抱えた要支援学生にとどまらず、要支援学生をつくらないという予防的措置としての機能を含むことが特徴的である。そこでは、学生たちが「より多くかつより多様な教員・職員・上級生・同級生・下級生と繋がること」が重要視される。すなわち、サポートを要する学生を受け身的に待つだけでなく、積極的に学生生活を充実させるイベントを企画し学内の絆(social bonds)づくりをおこなうことも主要な活動となっている。このようにして、他学生に直接的に関わりサポートすることに加えて、学内活性化にまで踏み込み間接的なサポートも意図していることが K 女子大学のピア・サポート活動の特徴である。そして、ピア・サポート活動を通し、要支援学生やピアサポート利用者の「他者成長」と共に、ピア・サポーター自身の「自己成長」を促すことを狙いとして定めている。

本稿は、この K 女子大学のピア・サポート活動について、開設した 2010 年 4 月から、2012 年 3 月までの 2 年間の活動状況をもとに分析をおこなう。なお、文中に出てくるアンケート結果はすべて 2011 年度末におこなった K 女子大学ピア・サポーター経験者の回答である。具体的には、2010 年度および 2011 年度にピア・サポーターを体験した 34 人に対して学内ポータルを使用してアンケートを実施し、22 人の回答を得たものである(回収率:64.7%)。

2. ピア・サポーターのメンバー構成

(1) 採用と研修の方法

ピア・サポーターの募集にあたっては、学年・学

科を問わずに募集をおこなっている(ただし前期募集の際のみ 1 年生は除外)。2010 年度は前期 26 名、後期 26 名、また 2011 年度には前期 24 名、後期 24 名を採用した。採用者の学年・学科は 4 学年 5～6 学科にわたる多様な構成となっている。なお、一度採用されると継続して活動を希望する者が多い。

新規採用したピア・サポーターには、臨床心理士資格を有するメンター他による研修をおこなっている(表 2)。この研修は、ピア・サポーターにとって他者とのコミュニケーションについて客観的かつ専門的に学ぶ機会となっている。また、必要に応じて学内での相談ニーズに応えるための特別研修などもおこなっている。特別研修とは、一例をあげれば 2011 年度には「授業でパワーポイントを使用する課題を出すのでサポートをお願いしたい」という旨の依頼が来た場合、相談に応じることができるようパワーポイントに関する研修をおこなった、などである。

(2) 組織構成の変遷

組織のあり方については、ピア・サポーターたちの活動しやすさを重視し、あらかじめ教職員側で決めるのではなく学生側の意見を取り入れるようにしている。そのため、たとえば、組織の代表者・副代表者が決まったのは活動を開始して 2 か月ほど経った頃である。2010 年 4 月の活動開始当初は特に役割を定めることなく活動をすすめていたが、ピア・サポーターである学生たちから「他団体と交渉するために代表者が決まっているほうがよい」という声があがった。さまざまな活動を企画する中で組織の顔となる人物がいた方がよいと判断したようである。そこで、代表者と副代表者が 1 名ずつ決まった。ただし代表と言っても、日常的な活動においては他のサポーターたちとすることが変わったわけではない。ただし、代表・副代表者の学生たちにとっては、活動へより強いコミットメントを感じるきっかけとなったようである。

表3. ピア・ひろば来場者数と相談者数の推移

(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.42より作成)

2010年度 前期	4月	5月	6月	7月	8月	2010年度 前期計	
来場者数	397	568	603	481	－	2,049	
昼休み以外 の来場者数	156	364	354	239	－	1,113	
相談者数	16	13	10	24	－	63	

2010年度 後期	9月 (4日間)	10月	11月	12月	1月	2月 (6日間)	2010年度 後期計	2010年度 計
来場者数	140	348	338	316	306	128	1,576	3,625
昼休み以外 の来場者数	26	171	175	186	150	73	781	1,894
相談者数	2	10	6	4	16	1	39	102

2011年度 前期	4月	5月	6月	7月	8月 (4日間)	2011年度 前期計	
来場者数	352	395	373	450	86	1,656	
昼休み以外 の来場者数	167	211	226	256	57	917	
相談者数	24	1	5	12	0	42	

2011年度 後期	9月 (9日間)	10月	11月	12月	1月	2月 (3日間)	2011年度 後期計	2011年度 計
来場者数	201	320	356	427	286	62	1,652	3,308
昼休み以外 の来場者数	96	165	219	270	185	49	984	1,901
相談者数	1	1	10	10	10	0	32	74

代表者・副代表者が決まってさらに2か月後、ピア・ひろばとしてはじめての大きなイベント（7月七夕イベント）を終えた頃、また新たな要望が学生たちのあいだから出てきた。すなわち、今後よりよい活動をおこなっていくためにイベント企画・開催を中心となってまとめていく役割が必要だという意見である。そこで代表者・副代表者に加えて、3名の学生が「幹部」として選出された。

翌年4月、さらに「幹部」の人数が増える。副代表を3名体制とするとともに、会計・渉外・広報が各2名ずつ決まった。このように学生が主体になって時間をかけながら少しずつ組織の責任体制が確立していった。それぞれの役割を明確化するとともに、それまで中心となっていた当時4年生の学生に加え下級生も役割を担うようにしたことが特徴である。このような役割の明確化と責任者を学年の下のものに引き継がせていく方法は、

かれらが主体的におこなっている学内のクラブ・サークル活動のパターンであり、それを応用したとも解釈できる。

3. ピア・サポーターの活動の様子

(1) ピア・ひろばの来場者数と相談件数

ピア・ひろばでは、授業開講期間の平日 12:00～17:40 のあいだ2名の学生（ピア・サポーター）が常駐し、学習面や生活上の相談に対面及びメールで応じている。表3は、ピア・ひろばの来場者数と相談者数（いずれも延べ数）を示したものである。来場者数を見ると、1か月におよそ300名以上の学生が利用していることが分かる。2011年度より新しい学生食堂（カフェ）ができた影響で、「来場者数」は2010年度より2011年度のほうが少なくなっているものの、「昼休み以外の来場者数」に限定して見ると、むしろ利用者数が増加している。

相談件数を見ると、ほぼ毎月なんらかの相談が寄せられている。特に4月と7月の相談件数がやや多く、履修登録と試験に関する相談ニーズが高いと言える。一方で、こうした特別な期間以外はピア・サポーターのメンバー入れ替えなどにより、うまく需要に応えきれない側面がある。例えば、統計ソフト（SPSS）の手法に関するものは、需要の高い相談内容のひとつである。しかし2011年度後期以降、統計の知識があるピア・サポーターが減り、相談件数減少の一因となっている。

(2) ピアイベントの開催と参加者

ピア・ひろばは、学生間・学年間・学部学科間の交流と支援の活性化にも努めている。ピアイベントの開催内容と参加者は、表4、表5に示すとおり

りである。イベント企画は、基本的にピア・サポーターである学生たちがおこなう。表4、表5に示した活動はいずれも、ピア・サポーターたちが「学生生活を充実させるためにどのようなことが学内でおこなわれるとよいか」を考えた末に生み出されたものである。4月の履修相談、試験前の相談強化、基礎学力向上の取り組みについては、教職員側から活動を要請したものであるが、その方法はピア・サポーターたちに一任している。多くの学生が気軽に参加できるようゲーム性を取り入れるなどの工夫が施されている。

2010年度と2011年度を比較すると、伝統を作ろうと継続・発展しておこなわれたもの（例：七夕イベント、学園祭への参加、履修相談→新入生歓迎会、基礎学力向上）もあれば、新しく企画されたイベン

表4. ピア・ひろばイベント実施報告(2010年度)

(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.43より作成)

イベント名	開催日	内容
履修相談会	4月 (授業開始～履修登録期間中)	各学科別に履修登録相談を受け付けるサポーターを配置し、相談にのった。
就活生集まれ!!	5-6月 (4回実施)	就職活動前・中の学生の交流・情報交換会を実施。 キャリアメンターの職員を交え、およそ週1回ペースでおこなった。 (延べ31人の参加)
七夕イベント	7/5-7 (キラキラ七夕祭期間)	多くの学生が楽しめることを目的としたイベントをピア広場のサポーターに学生目線から提案・企画した。 ・彦星を探せ!! (延べ1147人参加) ・メイク講座 (20人参加) ・ピア×茶道部 キラキラ七夕茶会 (64人参加) ・短冊にお願いごとを書こう ・EMブックスタンプラリーの抽選会 (29人参加)
テスト勉強対策Week	試験前～ (前・後期)	試験前にいつどんな学科・学年のサポーターがいるかポスターなどで告知し、学生目線で相談を受けた。
オープンキャンパス	7月、8月 オープンキャンパス開催日	・キャンパスツアー ・よろず相談コーナー ・学Boooの活動紹介 ・各種展示 ◇在学生が感じる光華のいいところ ◇おすすめ授業 ◇ピア・ひろばイベント紹介 ◇在学生のバイト体験 ◇出身県別先輩から高校生へのコメント 参加者数=40名(アンケート回答者のみ)
プチ学Booo	10月	学内の教員を講師に「この名画をいくらで買うべきか?—世界のボードゲームで養う論理と判断の力—」をおこなった。7名参加。 ※プチ学Boooとは、教職員を講師として、1回(90分)のみのラーニングコミュニティのこと。学生が教職員にリクエストもおこない、より学生の興味に即した内容で実施する。(授業で学んだことをより深く知りたいなど)。
学園祭への参加	11/19,20	学園祭をより盛り上げるためのヒントを得ることを目的としたアンケートを作成・実施した。対象者を、あかね祭当日来場者(学外者含む)に加えて、非来場者(後日学内にてK女子大学学生対象に実施)向けにもアンケートをおこない、より多様な意見を集めることができるように努めた。
基礎学力向上	毎週更新 (後期～)	基礎学力向上を目的としたもの。さまざまな人を楽しんで基礎学力向上をしてもらえるように、毎週2問程度ピア・ひろばに問題を貼りだし学習啓蒙をおこなった。

表5. ピア・ひろばイベント(2011年度)

(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.44より作成)

イベント名	開催日	内容
新入生交流会	4/4,5	オリエンテーション初日に、緊張と疲労が高まっているであろう新入生への癒しを提供するとともに、ピアサポーターとの懇談を通じて同学年だけでなくナナメの関係づくりを促進した。 4日＝@学内カフェ(45人参加) 5日＝@ピア・ひろば(25人参加)
東日本大震災チャリティフリーマーケット	6/7・8	東日本大震災の被災者への募金を目的としてチャリティフリーマーケットをおこなった。物品は学生・教職員から集めた。 集まった物品＝800強(募金も含め総額11万6824円を義援金とした)
七夕イベント	7/7 (キラキラ七夕祭期間内)	多くの学生が楽しめることを目的に、複数のクラブ・サークルとコラボレーションして、同時に学内の横のつながりづくりに努めた。 ピア×茶道部(お茶会:32人参加) ピア×演劇部(クロスワードパズルで学内散策:40人参加) ピア×写真部(七夕にちなんだ写真の展示)
テスト対策	試験前～ (前・後期)	試験前にいつどんな学科・学年のサポーターがいるかポスターなどで告知し、学生目線で相談を受けた。
オープンキャンパス	7月、8月 オープンキャンパス開催日	・キャンパスツアー ・よろず相談コーナー ・学内で実施しているラーニングコミュニティの活動展示 参加者数＝73名(アンケート回答者のみ)
ドッジボール大会	10/31	スポーツを通し、学生同士の交流拡大を目指した。イベントサークルとコラボレーションして実施。 参加者数＝40名
学園祭への参加	11/19,20	昨年度実施したアンケートの結果に基づき、来場者に、より学園祭を楽しんでもらいやすいような工夫をこらすことを目的として、休憩所、模擬店等の宣伝、水の提供をおこなった。
基礎学力向上	毎週月曜日更新 (後期より実施)	さまざまな人を楽しんで基礎学力向上をしてもらえるように、毎週2問程度ピア・ひろばに問題を貼りだし、ピア・サポーターに聞いて答え合わせをするようにした。 スタンプカードを作成し、スタンプがたまったら人には小さな景品を進呈。 参加者数＝51名(イベントとしておこなった「お年玉争奪戦」のみの人数)

トもある(例:チャリティフリーマーケット、ドッジボール大会)。

(3) ピア・ひろばの活動成果と課題

ピア・ひろばは、創設主旨にあったとおり次の6つの役割を期待されている。①居場所の創出、②各学部学科間・学年間交流、③相談窓口の一元化、④身近な上級生の対応による気軽な相談窓口の提供、⑤イベント企画によるキャリア形成や学習の啓蒙、⑥利用者やピア・サポーターの社会的スキルと自信を醸成する。

この6つの役割に即しながら、活動成果と課題を整理してみたい。まず「①居場所の創出」に関しては、学生の利用しやすい学習環境及び居場所の提供ができたと言える。具体的には、学校が開いているあいだ常時利用できるようにし、朝早い時間や遅い時間のPCなどの利用ニーズに答えている。また、友達と雑談を交えた会話をしながら勉強する学生の姿が

見られ、「ながら勉強」という「現代的、なパターン」が成立した。また、空き時間に一人でいても居心地のよい場所になったと学生は言う。

一方で課題もある。第1に、来場者数の問題である。時間帯によっては来場者ゼロの現象が生じている。学生のキャンパスライフの動線の中に場所を設けることができなかったことが影響していると考えられる。第2に、「ながら勉強」と「静かな学習・相談スペース」は、空間的に共存が難しく、学習環境というものについて再考する必要がある。

「②各学部・学科・学年を超えた仲間づくり・コミュニケーション・情報交換の活性化支援」に関しては、これを実現すべく学生が中心となったイベントが開催されている。その中では、学部・学科・学年間の壁を超える関係構築が生まれている。また各クラブ・サークルとコラボしてイベントをおこなうことにより、結果として各クラブ・サークルの活動支援ともなっている。すなわちこれらのイベントは、

ピア・サポーター以外の一般学生を巻き込みながら、学内活性化を促しており、ピア・ひろばの成果として評価できるものである。ただ問題点をあげれば、学生同士の交流は一時的なものに留まった面も観察され、本来狙っていた学生の仲間づくりや情報交換をする恒常的な関係構築が十全におこなわれたとは言いがたい。その対処法のひとつとしては、今後は小規模でも定期的なイベント開催が考えられる。

「③相談窓口の一元化」と「④身近な上級生の対応による気軽な相談窓口の提供」に関しては、当初の狙い通り、学生にとって利用しやすい相談窓口の提供に成功したようである。事実、新入生にとっては教職員への質問はハードルが高いため、資格取得など学生生活に関する相談に来る姿が見られた。ただし、相談件数を見ると、決して相談が多いとは言えない。ピア・ひろばの今後の課題のひとつである。この問題については、相談を受けるピア・サポーターのメンバー構成も指摘しなければならない。ひとつは、ピア・サポーターの学科間の偏りについてである。現在、希望者を採用するかたちをとっているため、必然的に所属学科の偏りが生じるようになってきている。このことは専門的学習の支援の面で大きなネックとなっている。希望者のみが集まっているからこそ、組織の活気を維持できる活動が可能になっていることを考慮に入れつつも、今後の採用方法を検討していく必要がある。同時に、ピア・サポーターの配置人数の都合や、1・2年生のピア・サポーターの配置などにより、専門的学習の支援が困難な時間帯が生じていることがいまひとつの検討課題である。この部分については、3年生以上など上級生のみを採用する形をとればある程度解消されることであろう。しかし一方で、上級生のみを採用となると、個々のピア・サポーターの経験年数が必然的に短くなり、イベント企画など組織的に活動する場合

の牽引役を期待することが難しくなる。学生自治組織としての機能を重視するのであれば1・2年生から採用し、人材を育てていかざるを得ない。すなわち、専門的学習支援要員配置とイベント企画及びリーダーの育成との矛盾が指摘される。

「⑤イベント企画によるキャリア形成や学習的啓蒙」に関しては、ピア・サポーターが知恵を出し合い、楽しく参加できる基礎学力向上イベントの実施や就職活動中の学生の交流会などを企画・実施した。日常的におこなっている活動なので純粋な参加者数をカウントすることは難しいが、一定程度の参加者を得るとともに参加者には好評である。まだまだ発展の可能性はあると思うが、まずまずの成功をおさめていると言える。ただし、今後さらに質的充実を図るなら学生だけでは限界があることを指摘しておきたい。その理由としては2つある。1つは、学生のみ情報量では学内にどのようなニーズがあるか、またそのニーズを満足させるためにどのようなツールが利用できるかなどの把握が困難である。2つめは、ピア・サポーターのマンパワーの問題がある。授業の合間のみの活動であり、1人ひとりのピア・サポーターの活動可能時間に限界がある。その中で体系的な活動をおこなっていくことは学生のマンパワーのみではかなり難しい部分もある。

以上示したように、K 女子大学のピア・サポート活動は、課題がありながらも一応の成果をおさめていると言える。さらに、居場所の提供、相談業務、あるいはイベント開催により「⑥利用者の社会的スキルと自信を醸成する」ことへも貢献できたのではないだろうか。表6は学生生活を送るのにピア・サポート制度がどの程度役に立つかを、学生の立場からピア・サポーターたちに回答してもらったものである。「どちらともいえない」という慎重な回答も1割程あるとは言え、概ね肯定的な回答を得ている。

表6. ピアサポート制度は学生(ピアサポーター含む)が学生生活を送るのにどの程度役に立つと思いますか。

	とても役に立つ	役に立つ	やや役に立つ	どちらともいえない	あまり役に立たない	役に立たない	まったく役に立たない	計
度数	5	9	11	3	0	0	0	28
%	17.9	32.1	39.3	10.7	0.0	0.0	0.0	100.0

(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.47より転載)

表7. ピアサポート制度は大学を活気づけるためにどの程度役に立つと思いますか。

	とても役に立つ	役に立つ	やや役に立つ	どちらともいえない	あまり役に立たない	役に立たない	まったく役に立たない	計
度数	4	15	8	1	0	0	0	28
%	14.3	53.6	28.6	3.6	0.0	0.0	0.0	100.0

(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.47より転載)

表8. ピアサポーターとして活動して、次のような力は身に付きましたか

		とても 身に付いた	身に付いた	やや 身に付いた	どちらとも いえない	身に付かなか った	計
1.物事に進んで取り組む力	度数	2	11	13	2	0	28
	%	7.1	39.3	46.4	7.1	0.0	100.0
2.他人に働きかけ巻き込む力	度数	2	11	8	6	1	28
	%	7.1	39.3	28.6	21.4	3.6	100.0
3.目的を設定し確実に行動する力	度数	2	10	10	6	0	28
	%	7.1	35.7	35.7	21.4	0.0	100.0
4.現状分析し目的や課題を明らかにする力	度数	1	15	7	4	1	28
	%	3.6	53.6	25.0	14.3	3.6	100.0
5.課題解決のプロセスを明らかにし準備する力	度数	1	12	9	6	0	28
	%	3.6	42.9	32.1	21.4	0.0	100.0
6.新しい価値を生み出す力	度数	2	9	7	10	0	28
	%	7.1	32.1	25.0	35.7	0.0	100.0
7.科学的・数量的にものごとを見る力	度数	0	6	9	12	1	28
	%	0.0	21.4	32.1	42.9	3.6	100.0
8.多様な人とともに目標に向けて協力する力	度数	7	15	5	1	0	28
	%	25.0	53.6	17.9	3.6	0.0	100.0
9.自分の意見を分かりやすく伝える力	度数	1	11	10	6	0	28
	%	3.6	39.3	35.7	21.4	0.0	100.0
10.相手の意見を丁寧に聴く力	度数	9	10	7	2	0	28
	%	32.1	35.7	25.0	7.1	0.0	100.0
11.意見の違いや立場の違いを理解する力	度数	11	8	7	2	0	28
	%	39.3	28.6	25.0	7.1	0.0	100.0
12.自分と周囲との関係性を理解する力	度数	5	10	10	3	0	28
	%	17.9	35.7	35.7	10.7	0.0	100.0
13.社会のルールや人との約束を守る力	度数	5	11	10	2	0	28
	%	17.9	39.3	35.7	7.1	0.0	100.0
14.ストレス発生源への対応力	度数	2	9	9	7	1	28
	%	7.1	32.1	32.1	25.0	3.6	100.0

(鳥越2012「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進 成果報告書」p.47より転載)

次に、大学を活気づけるために役に立つということについては、より肯定的な回答が多い(表7)。直接的に学生生活に役立つというより、大学の活性化に影響を与えたという実感の方が強いようである。

一方で、ピア・サポーターも成長をしている。表8を見ると、彼らがこの活動を通じて「社会人基礎力」の各要素を身に付けたと感じていることが分かる。項目によってバラツキはあるものの、ほとんどの項目で「とても身に付いた」～「やや身に付いた」という肯定的な回答を得ている。

Ⅲ. ピア・サポート活動におけるピア・サポーターの学び

1. ピア・サポート活動を通して学生が得ているもの

前項に示したように、K女子大学のピア・サポーターたちは、活動を通して自身の成長を感じている。次に、この彼らの学びについて、彼ら自身の言葉からより詳細に探ってみたい。毎学期末にピア・サポーターたちに各自の活動を振り返ってもらった。以下にサポーターたちの語りを具体的に示

すが、その語りのポイントは次の3つに要約できる。「能動的に考えるようになった」、「新しい人間関係構築ができた」、「他人の役に立った」、の3点である。以下にこれら3点の具体的な内容を紹介する。

(1) 能動的に考える習慣の構築

ピア・サポート活動の中では、ピア・サポーターたちが全員それぞれ能動的に行動することを要求される。例えばイベント開催で言えば、その企画は「学生目線」が期待され、教職員を頼ることはできず、彼らは能動的行動をするしかない。またイベント準備～当日においても、それぞれが授業の合間を縫って限られた人数と時間でおこなうため、各人の能動性なくしては成り立たない。そうして能動的に考え・行動しつづけることによって、彼らが自らの言動をセルフ・モニタリングできるようになり、それが習慣化したと言えよう。

さらに、ピア・サポーターたちは「もっと学校を盛り上げていきたい」「後期はもっと自分から提案・意見していこうと思う」とより充実した活動を実践

していくことを望む発言をしている。それは2年目以降のイベントの内容発展や新企画という形で現れている。この現象は、イベント開催の場面だけではなく、相談業務についても同様であった。例えば、相談件数の伸び悩みに対処すべく、ピア・ひろばのレイアウトを変えたり、ピア・サポーターの名札が工夫された。こうした意欲に基づく行動は、能動的に考える習慣をさらに強めている。

また、ピア・サポート集団の中では、コミュニケーションが決して得意ではない学生にも、自然と能動性を意識させる雰囲気があるようだ。次はいずれも2010年度後期以降に採用された「後輩」ピア・サポーターの語りである。「今まで自分の思った事を言うのは怖くて仕方ありませんでした。ですが、ピア・サポーターをさせてもらって『言わなきゃ…行動しなきゃ…!!』と思いました。ただ、まだ思っただけで行動には移せなかった気もするけれど、自分の中では『成長した!!』と思いました」、「正直、ピアには興味だけで入りましたが、後期の間やってみて先輩たちはいろんなことを考えていて様々なぶつかり合いもあると思いますが、大学生活を良くしたいと思って、みなさんやっていることなので、私もそこに入れるように、頑張りたいと思いました。』。そこには能動的行為を強いる圧力があるというよりむしろ、能動的に活動することの楽しさ認識が含まれている。「フリーマーケットやオープンキャンパスの企画をする楽しさ、相手のことを考えて作るポスターやチラシの難しさ等、普段の生活では体験できないことを体験することができ、学ぶことも多く、勉強になりました」。

(2) 新たな人間関係の構築

学生たちのほとんどが「サポーターをしていて、日頃は関わることもない他の学科・学年の方と話す機会があったことがよかった」と新しい出会いを喜んでいる。学科や学年の壁を超える人間関係が構築できたことは、ピア・サポーターが多様な学科・学年でメンバー構成されているという初期設計に由来する。

しかし彼らは、単に新しい人との出会いに喜んでいるばかりではない。同時に、自身が今までとちがう他者との関わり方を成立させることができたとも述べる。「自分の意見を言ったり、人の意見に耳を傾けたりできたことがよかったです」というような学生のコメントが典型であるが、これまでとは違う多様なコミュニケーションの成立を喜ぶ声が強い。これらのコミュニケーションを通じ「物の見方が変

わりました。『後輩のため』と考えたり、自分本位の考え方が少し減りました」というような自己変革を成している。

実際、彼らの学期末の活動を振り返る語りからは、「いろんな人と交流する『力』がついたと思う」、「ピアサポとしての活動は、社会の縮図みたいなものだと思うので、自分にとっていい経験ができたし、成長にもつながった。」、「自分だけの世界観にとらわれずにいろんな方とお話することで吸収できることがたくさんあり自分にとってプラスになることがたくさんあったと感じることができました。」など、同じ大学に通う同年代の、しかもピア・サポート活動に興味を持つという点で共通性も多いであろうピア・サポーター間の人間関係の話にしては大げさに感じるきらいもあるが、彼らがいかに他者を理解しようと努力奮闘しながら活動をすすめているかがうかがえる。また、先の表8が示すように、「とても身に付いた」と多くの学生が回答しているのは「10. 相手の意見を丁寧に聴く力」、「11. 意見の違いや立場の違いを理解する力」である。

こうしてピア・サポーターたちは協働して活動しながら、集団としての凝集性を高めていったようである。高い凝集性は、学期末にピア・サポーター継続の希望を聞くと、このまま続けたいと望む学生が多いことにも裏付けられよう。そしてその継続意志の背景には、人間関係の形成に魅力を感じていることも一因となっていると考えて間違いない(Cartwright & Zander, 1959¹²⁾)。

(3) 他人の役に立つ——達成感から意欲形成へ

彼らの活動の原動力となっているのは、活動を通して得られる達成感であろう。ピア・サポーターたちが達成感を抱いているであろうことは、彼らの言葉の中に簡単に見つけることができる。例えば「ピアのイベントを宣伝していると、やったよーとかみたよーとか言ってもらえて、少しずつでも知る人が増え参加しやすくなっているのかなと思った。それを言ってもらえるだけでやる気が出るので、もっと楽しんだり勉強しやすいように学生ならではの考えをとりいれていきたい」。また、先の表6、表7に示したように、彼らが大学の活性化や学生の生活充実においてピア・サポート制度が役に立つと評価している事実からも知ることができる。

また、そこには活動をやり遂げたという素朴な達成感だけではなく、自己の活動が「他人の役に立ってた」というような気持ちも抱いているようだ。『就

活生集まれ!!!』をして、実際に就活を始めてくれたり、相談にのれたり……など少しは貢献できたかなと思います」、「ピア・サポーターになってから、ちょっとでも人の役に立てられたような気がします。大学に貢献できたかはわからないけど、ピア・サポーターを通して、この学校を盛り上げたりできたらいいなと思います」、「大学に貢献できたと思います。昨年に比べると『渉外』という役職に就いて仕事をしたり、チャリティフリーマーケットの準備や会計、オープンキャンパスの手伝い、学園祭などに自ら行動できていたので、昨年の自分より成長できたと思います。来年度は今年度よりもっと活動できるように頑張りたいです」。

この達成感から生まれる意欲により設定される目標は、二種類ある。集団レベルでよりよい活動を志向するというものと、個人レベルで各自の行動変容に関するものである。個人レベルでの目標設定は次に紹介する能動的に考える習慣の構築へと結びついていく。

以上の3つを改めて見直すと、ピア・サポーターたちは能動的に行為せざるを得ない立場に置かれ、他の人と意見を交わしながら活動し、周りの学生の反応により達成感を抱き、次の活動への意欲を向上させる、とまとめることができる。すなわち、この3つは循環しつつ相互に関わり合って成り立っている。この循環を繰り返しながら、彼らはいわばピア・サポート実践力を高めているのである。そして、それが社会人基礎力の獲得につながっていると考えられる。

2. ピア・サポーターの成長を支える4つの背景

本事例において、ピア・サポーターらが、活動を通してピア・サポート実践力を高め、各人の社会人基礎力を獲得していることを指摘した。それは分解すると4つの背景に支えられていると考えられる。

1つ目は、能動的に行為せざるを得ない「環境」である。本事例では組織構成から実践まで基本的に学生たちに任されていた。それは放任しているということではない。むしろ、教職員は彼らの力に期待をしながら見守ることを徹底した。これは学生たちというより、その周囲の教職員の心構えに関わるものである。2つ目に、互いに理解し協働し合う「集団内の関係性」がある。これによって学生たちの能動性が保障されるのである。K女子大学においても、活動当初は、他の学生に嫌われないように突出しないようにと、周りの顔色を

うかがって話し合いが成り立たない場面もあった。建設的な議論ができるようになったのは、相手の意見に耳を傾け、意見のちがいを理解するようになってからである。そして、彼らがこの部分についてどれほど努力していたかはすでに示したとおりである。3つ目に、成功体験に基づく「動機づけ」があげられる。これがあってはじめて、能動的行為や集団内の関係性を変容させていくことに積極的になったと言えよう。そして、集団の能動的行為を促す「集団内の雰囲気（文化）」が4つ目である。これは、学生たちが活動を通して行動変容することにより徐々に発現してきたものである。後輩ピア・サポーターたちが先輩ピア・サポーターを見倣って行動しようとしていたが、この集団内の雰囲気（文化）も学生を成長させるきっかけを与えている。

IV. 結語

活動をしている学生たちが一番悩んでいる時間が長かったのは、実は活動そのもののことより人間関係についてである。いまの学生にとって協働するということがいかに難しいことか、ということである。本事例のピア・サポーターたちにとってピア・サポート活動は、これまで自分のことで精一杯だった学生たちに、他者のために考えたり動いたり、他者と協働する機会を提供した。そして、活動を通して自己中心的なものの見方や考え方を脱却し、その変化が自己成長につながっていったようである。

しかしこのことは、一般的な学生たちの対人能力やスキルの低下ではなく、むしろ彼らのこれまでの学校生活などでそのような経験を積む場がなかったということであろう。大学生が「生徒化」¹³⁾している（伊藤 1999）と言われ始めて久しい。大学生活の自由な時間の縮小に伴う文化的広がり減少、すなわち遊戯性や対抗性、特異性等のいわゆる学生文化の特徴が今の大学生の学生生活から失われているということ、そして大学が従来持っていた学生の自立性を養う場としての機能が失われてしまうことが危惧されている（武内 2003¹⁴⁾, 2005¹⁵⁾）。事実、いまの「生徒化」した学生と、主体的な学びを求める大学とがミスマッチを起こしていることを指摘するデータもある（半澤 2007¹⁶⁾）。そしていまや逆説的なことであるが、大学が「学校化」し学生たちに適応を求め学生を「生徒化」させている（新立 2010¹⁷⁾）とする指摘もある。本稿の事例は限られたものではあるが、現代的学生と大学の状況に対して、「脱生徒化」・「脱学校化」

させるためのヒントを考える際にも有用な示唆を与えるものではないだろうか。

V. 謝辞

本稿は、京都光華女子大学が2008年に選定された学生支援GP（「学生個人を大切にしたい総合的支援の推進～エンロールメント・マネジメントと個別対応教育モデルの実践的融合～」）の取り組みのひとつとしておこなったトラッキング・サポートの一部を取り上げ、大学におけるピア・サポート活動の成果と課題について考察したものである。

改めて、ここに京都光華女子大学の旧EM推進センター員をはじめとする教職員の皆様及び学生の皆様に感謝を記す。

引用・参考文献

1. 沖裕貴・宮浦崇・林泰子・井上史子：高等教育における学生参画の制度，日本教育情報学会年会，27,pp.74-77,2011.
2. 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努：ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望，山口県立大学社会福祉学部紀要，第13号，pp.107-121,2007.
3. 岡田裕美子：大学新入生のピア・サポート訓練を通じた気づきについての考察，福山大学こころの健康相談室紀要，第4号，pp.25-33,2010.
4. 山崎理央・三宅幹子・橋本優花里・平伸二・松田文子：大学生へのピア・サポート訓練による自尊感情や自己開示、社会的スキルへの効果の検討，福山大学人間文化学部紀要，第5巻，pp.19-30,2005.
5. 宮尾正樹：事例紹介 学生同士で支援の論をつなぐーお茶の水女子大学文教育学部のピアサポート・プログラム，大学と学生，29,pp.42-47.
6. 中出佳操：大学生によるピア・サポート活動とその意義，人間福祉研究，第6号，pp.85-99,2003.
7. 中出佳操・今野礼子・青池美紀・川村道夫：学生相談の現状とピア・サポート活動の活用に関する研究，北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要，第42号，p.227-234,2004.
8. 伊東孝郎：白鷗大学におけるピア・サポート活動，白鷗大学発達科学部論集，第3巻第2号，pp.41-66,2007.
9. 内野悌司：広島大学ピア・サポート・ルームの初年度の活動に関する考察，学生相談研究，23,pp.233-242,2003.
10. 金明秀：事例14 私立京都光華女子大学，平成20年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」事例集，東京都，独立行政法人日本学生支援機構「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」実施委員会，pp.87-92,2008.
11. 京都光華女子大学EM推進センター編：学生個人を大切にしたい総合的支援の推進～エンロールメント・マネジメントと個別対応教育モデルの実践的融合～成果報告書平成20～23年度，京都府，2012年．
12. D. カートライト & A. サンダー著、三隅二不二・佐々木薫編訳：グループダイナミックス，東京都，誠心書房，1959.
13. 伊藤茂樹：大学生は生徒なのか，駒澤大学教育学研究論，15巻，pp.85-111,1999.
14. 武内清編著：キャンパスライフの今，東京都，玉川大学出版部，2003.
15. 武内清編著：大学とキャンパスライフ，東京都，上智大学出版，2005.
16. 半澤礼之：大学生の学業適応を捉える視点，大学院研究年報，36号，pp.112-115,2007.
17. 新立慶：大学生の「生徒化」論における批判的考察，教育論叢，53,pp.67-75,2010.
18. 青山巧・長澤郁夫・池山圭吾・福岡敏之・小川巖：新入生セミナーにおける学生の活用と成果，教育臨床総合研究，9,pp.1-7,2010.
19. 細川和仁：初年次教育における学習ピアサポート活動，秋田大学教養基礎教育研究年報，10,pp.1-9,2008.
20. 細川和仁：大学生にとっての授業・指導と学習支援，秋田大学教養基礎教育研究年報，8,pp.1-9,2006.
21. 井上清子・石川洋子：必修授業における上級生から下級生へのピアカウンセリングの試み，文教大学教育学部紀要，第45集，pp.13-20,2011.
22. ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖、福島真人訳：状況に埋め込まれた学習，東京都，産業図書株式会社，1993.
23. 懸川武史：ピア・サポートモデルによる学校マネジメントの実践，群馬大学教育実践研究，第26号，pp.155-162,2009.
24. 永井智・松尾直博・新井邦二郎：大学新入生に対するピア・サポート活動の試み，東京学芸大学紀要第1部門，55,pp.81-91,2004.
25. 中出佳操：ピア・エデュケーション活動の

- 理論的側面からの考察, 人間福祉研究, 第 11 号 :pp.81-89,2008.
26. 西山久子・山本力:実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 第 2 巻 :pp.81-93,2002.
27. 大石由起子・林典子・稲永努:大学における新入生支援としてのピアサポート活動, 山口県立大学学術情報, 第 3 号 :pp.29-44,2010.
28. 佐藤学:学びの場としての学校, 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編, 学び合う共同体, 東京大学出版会, 東京都,1996,pp.91-92.
29. 内野悌司:学生ボランティアによる学生相談活動の試み〜広島大学ピア・サポート活動について~, 大学と学生 ,460:pp.40-46,2003.